

3. 宣教師ニコライ¹の活動²

1. 宣教師ニコライの日記の発見

宣教師ニコライ(本名イヴァン・ドミートリエヴィチ・カサートキン Иван Дмiтриевич Касáткин, 1836年8月13日～1912年2月16日)は、幕末から明治期にかけての日露文化交流の最大の功労者であるが、文献資料がないため、いつしか歴史に埋もれかけていた。

1912年(明治45年)2月16日のニコライ大主教の死後、ニコライ大主教の書き残した日記その他の文献資料は関東大震災(1923年9月1日)で全て焼失したと信じられていたため、神田ニコライ堂(日本ハリストス正教会復活大聖堂)の創建者であるニコライ大主教は、名は知られながら知られざる人物であった。

1979年、中村健之介・東大教授、ニコライ大主教の日記³がレニングラード(現サント・ペテルブルグ)の古文書館に保管されていることを確認。



2. 函館のロシア領事館の設置と宣教師ニコライの来日

2.1. 宣教師ニコライの生い立ち

1836年8月13日(露暦1日)、イワン・ドミートリエヴィチ・カサートキン、スモレンスク県ペリ郡ペリヨーザ村(Березовский погост, Бельский уезд, Смоленская губерния)の教会の輔祭の子として生まれる。郡教会付属初等学校、郡神学校を経て、1860年ペテルブルグ神学大学を卒業し、「ゴロヴニンの手記(『日本幽囚記』)によって日本民族への愛情がわいた」ため、妻帯司祭ではなく修道司祭として来日することを決意し、箱館ロシア領事館付司祭に任命される。

2.2. 宣教師ニコライ来日までの経緯

- 1855年2月7日 日露通好条約(下田条約)調印。
- 1858年10月24日 プチャーチン使節の中国語通訳であったヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケーヴィチ(Иосиф Антонович Гошкёвич, 1814～1875年10月5日)、箱館のロシア領事館の初代領事として着任。同時にプチャーチン使節のディアナ号の艦付き司祭であったワシーリー・マーホフ(Васiлий Махов)が領事館付き長司祭(прогоиерей)として着任。しかし、マーホフは着任時すでに60歳の高齢であったため、ゴシケーヴィチ、宗務院⁴(Синод)に後任の派遣を要請(日本において将来、布教が許可される可能性を示唆し、有能な司祭を求めた)。
- 1860年7月4日 24歳のカサートキン、応募者4名の中から選ばれ、剪髪式を受けて修道士となり名を(露暦6月22日)ニコライと改める。
- 12日 ニコライ、ペトル・パウエル祭の日にサントペテルブルグ神学大学の十二聖使徒聖堂(露暦6月30日)で司祭に叙聖。
- 8月13日 親兄弟たちと別れ日本に向けてシベリア横断の旅に出発(シベリアを馬・船で横断)。

¹ 最終的には大主教に叙聖されたので、「ニコライ(日本)大主教 Архиепископ Николай Японский」とも言う。日本ハリストス正教会では「聖使徒聖ニコライ」あるいは「聖ニコライ」と呼んでいる(<http://www.orthodoxjapan.jp/> [2011年5月9日アクセス])。

² 中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』(岩波書店、1996年)および注3の年表を参考にしている。

³ 中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記(全9巻)』教文館、2007年。本学、キリシタン文庫に所蔵。

⁴ 正確には最高宗務院(Святёйший Правительствующий Синод)。ピョートル1世により創設されたロシア正教会を監督するための国家機関。

- (露歴 8 月 1 日) この別れのときに父ドミートリーからもらったキリストの聖像は生涯ニコライの自室にあったと言われる。
- 9 月下旬 ニコラエフスク (Никола́евск)⁵に到着し、当地で越冬中のアラスカで宣教の経験を持つ、のちのモスクワ府主教イノケンティ (Митрополи́т Иннокенти́й Московский = Ива́н Евсе́евич Попо́в-Вениа́минов, 1797 年 8 月 26 日～1879 年 3 月 31 日) と出会い、聖書と祈禱書を宣教地の言語に翻訳し正教の土着化を計ることを教えられる。
- 1861 年 7 月 14 日 ロシア軍艦アムール号で箱館に到着、領事館に着任。

3. 宣教師ニコライの活動

3.1. 宣教師ニコライ、日本を学ぶ

- ?～1864 年 西蝦夷警備のため派遣された秋田の久保田藩兵とともに箱館に来ていた軍医・儒学者木村謙斎について日本語・日本史 (『古事記』、『日本外史』) などを学ぶ。
- 1864 年 4 月 航海術を学ぶため箱館に来た新島襄 (当時 22 歳、のちの同志社創設者) について日本語・日本史などについて学ぶ。
- 1868 年 新島の脱国・渡米を助けた攘夷派宮司の沢辺琢磨 (さわべ・たくま、洗礼名パウエル, 1834 年 2 月 13 日～1913 年 6 月 25 日) を含む 3 名にキリシタン禁制下、洗礼を授ける。
- 1869 年初め 日本宣教団設立の請願のため一時帰国。プチャーチン (下田条約締結後、海軍軍人から政治家に転進し、1861 年国民教育相、その後国家評議会議員に勅任)、これを支援。
- 6 月 20～27 日 函館⁶五稜郭戦争。
- 1870 年 日本宣教団 (日本伝道会社) 設立。団長に任命され、修道司祭から学院に昇叙される。『宣教師ニコライの全日記』は、この年ペテルブルク滞在中の日記から始まる。
- 1871 年 3 月初め 函館に帰任。露和辞典を編纂刊行。



主の復活聖堂
(函館ハリストス正教会、1916 年創建)

3.2. 宣教師ニコライの布教活動

- 1872 年 1 月 東京神田駿河台 (現在のニコライ堂の所在地) に宣教団本部 (本会) を設立。布教活動開始。
- 明治期の日本ハリストス正教会にはロシア人宣教師は最も多い時期でも 4 ないし 5 人 (1877 年、在日外国人宣教師は、カトリック 45 名、プロテスタント各派 99 名)。→正教会は日本人伝教者による伝道が中心。
- 1873 年 明治政府、「切支丹禁制」の高札を撤去。
- 1875 年 パウエル沢辺、函館で司祭に叙聖。
- 1876 年 東京本会に女学校、正教神学校を創立。
- 1877 年 11 月 機関紙『教会報知』第 1 号発行。
- 1879 年春 東京復活大聖堂建設資金募金のため 2 回目の一時的帰国。
- 1880 年 ペテルブルクでプチャーチン一家と親交を深める。学院から主教に昇叙。ドストエフ

⁵ 現ニコラエフスク・ナ・アムーレ (Никола́евск-на-Аму́ре)。

⁶ 函館市ホームページによると、箱館から函館へと名称が変更されたのは 1869 (明治 2) 年のことであるという (http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/soumu/hensan/yowa/yowa_contents/yowa_001.htm [2011 年 5 月 9 日アクセス])。

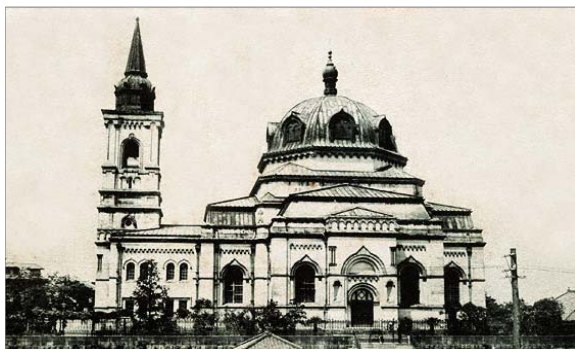
スキーと会う。11月、日本に帰国。12月、山下りん、イコン制作修得のためペテルブルクへ留学（1883年帰国）。『教会報知』に代わり、『正教新報』発刊。

1881年 群馬県・東北地方を巡回。

1882年 九州、中国、四国地方を巡回。パウエル中井木菟麿（なかい・つぐまる）とともに奉神礼用諸書の翻訳を開始。大阪に伝教学校を開設。

1884年 プチャーチンの娘オリガ、日本宣教団支援のため来日（1987年帰国）。東京復活大聖堂着工。

1891年3月20日 東京復活大聖堂竣工。



創建当時（左上・右上）および現在（右下）の東京復活大聖堂（ニコライ堂）

1891年5月 皇太子ニコライ来日（4月27日～5月19日）。大津事件で負傷した皇太子を京都の常盤ホテルに見舞う（5月）。北海道、九州の諸教会を巡回。

1892年 中国、四国地方、東海道方面、上総地域、群馬県、八王子などを巡回。女性文芸雑誌『裏錦』発刊。

1893年 長野県、北海道、一関、盛岡、福島などを巡回。

1894年 中井とともに新約聖書の翻訳にとりかかる。

1895年 この年、全国に220の教会、信徒数は約22,000名（男女ほぼ同数）。

1898年 色丹島を含む北海道各地の教会の巡回。教役者の互助組織「遺族慰問会」が誕生。

1900年10月 信徒家庭向け月刊誌『正教要話』発刊。

1901年 正教会訳『我主イイスス ハリストスノ新約』刊行。

1904年2月8日 日本陸軍、朝鮮の仁川に上陸（日露戦争開戦）。

9日 日本海軍、旅順港のロシア軍艦2隻を撃沈。

10日 日本、ロシアに宣戦布告。

ニコライの主教教書「神に祈りてなんじらの皇軍に勝利を賜わんことを求めよ」。

ロシア駐日公使ローゼン、公使館全員の退去を決定。ニコライにも帰国を促すが、ニコライはとどまることを決意。

ロシア正教会信徒をロシアのスパイ（露探）呼ばわりする風潮蔓延。

ニコライ、ロシアの敗北に恥辱を感じる（愛国心の高揚）。

- 1905年 約 79,000 名のロシア兵捕虜の「信仰慰安」のため全力を尽くす。日露戦争終結（9月5日ポーツマス条約調印）。
- 1906年4月6日 ロシア宗務院より大主教に昇叙される。
- 1911年 日本宣教 50 周年記念祝賀会。この年、信徒 31,984 名、教会 265、聖職者 41 名、聖歌隊指揮者 15 名、伝教者 121 名。
- 1912年2月 心臓病が悪化、聖路加病院に入院。その後、主教団に戻る。
- 16日19:00 永眠（75歳）。22日、東京復活大聖堂で葬儀。谷中墓地に葬られる。「遺業は、大聖堂 1、聖堂 8、会堂 175、教会 276、主教 1、司祭 34、補祭 8、伝教者 115、信徒総数 34,111 であった」。
- 22日 東京復活大聖堂で葬儀。谷中墓地に葬られる。「遺業は、大聖堂 1、聖堂 8、会堂 175、教会 276、主教 1、司祭 34、補祭 8、伝教者 115、信徒総数 34,111 であった」。
- 1917年 日本正教会、ロシア正教会との関係断絶。
- 第2次世界大戦後 日本正教会、在米ロシア正教会と関係を構築。
- 1970年4月10日 日本正教会代表団、モスクワにおいて総主教アレクセイより、日本正教会の聖自治教会（アウトノモス）の祝福を得る。同日、ニコライ大主教、ロシア正教会において「亜使徒」として聖人に列せられる。

4. 宣教師ニコライの伝道の特徴

日本語を完全に習得している。

寒村僻地にまで足を運んでいる。

聖歌隊の組織を重視し、聖歌隊とともに各地を巡回している。